

絆の回復

(ルカ一五・一一～三二)

バブルの余韻も残る平成の初め。円満を絵にかいたような一つの家族があった。父親の衣鉢を継いだ兄弟は親子鷹、兄弟船で出世街道をまっしぐら。全国民を熱狂の渦に巻き込みながら成長し、遂には二人共角界の最高位に上り詰めた。世に言う「若貴フィーバー」である。しかし何時の頃からか二人の間にある確執が表面化、その後両親は離婚、父親は早逝、そして父の葬儀の際に兄弟の反目は表面化して、最近兄が弟を「あの人」呼ばわりしたとか。自身の横綱昇進が決まった日、「いい意味でのライバルでありたい」と語った弟に対し、「ライバルではない、兄弟だ」と笑顔を見せた「お兄ちゃん」はもういないのだ。

今朝の聖書の箇所はよく「放蕩息子のたとえ」と呼ばれているもので、イエスの説話の中でも最も有名で、あの芥川龍之介をして世界最高の短編小説と言わしめた珠玉の物語である。以下、この物語の登場人物である弟と兄が抱えている共通の問題と、その解決について考えてみたい。

一、弟の問題

この物語は弟が父に対してその財産の分け前を求めることから始まる。所謂生前贈与であるが、息子のほうから父にそれを要求することは「オヤジ、早くお陀仏(ー)してくれ」というようなもの。失礼極まりない要求であった。ところが父親は叱り飛ばすわけでもなく、言うままに財産を分けてやった。しかも後見人も付かず直接財産を手渡したのである。するとどうだろう、何日も経たないうちに、弟は何もかもまとめて遠い国に旅立ってしまったのである。「何もかもまとめて」という言葉には「全部を売り払って」という含意があるという。弟にとって大切なのは父親の愛情や絆ではなく、持ち運びに便利なカネだったのである。こう考えると彼の問題の根源はその後が続く放蕩三昧の生活以上に彼がカネと成功に目がくらんで、父との関係を断ち切ったことにある。このことは彼の放蕩後の変化によっても確かめられる。無一物になり、全ての絆を失った彼が思い起こしたのは父の家とそこで働く雇い人たちであった。かの地では雇い人でさえ今の自分の状況よりはずっとましな生活をしているということに気付いた彼は、住み慣れた家に向かい、父親に對して、大胆にも「父よ」と呼びかけたのである。

二、兄の問題

時に「放蕩息子」というタイトルはイエス自身に由来するものではないのだが、この刺激的なタイトルに影響されてか兄息子を気の毒に思う読者が少なくない。「一生懸命働いたのに十分に評価されず父親にたしなめられる兄はかわいそうだ」そう思う人が多いのである。しかしこの「弟は放蕩息子だが、兄は孝行息子」という図式化は実は成立しない。というのも良く読むと兄もまた父との関係において問題を抱えていたからである。ヒントになるのは二九節だ。主な日本語聖書では「私は何年もお父さんに仕え」と訳しているのであるが、原文には「お父さん」に当たる語は無い。あるのはむしろ「あなた」だ。自らを父の家の「奴隸」のように思っていた兄は父を「あなた」呼ばわりし、弟に至っては「このあなたの息子」と呼んで切り捨てた。こう考えると確かに兄は父の家には存在していたのではあるが、彼と父親との絆は断絶していたとしか考えられないのである。これに対して父はどうしたのだろうか。売り言葉に買い言葉で大げんかをしただろうか。決してそうではない。関係の断絶を口にする兄に対し、父はなお言うのである。「子よ」と。「あなた」呼ばわりされてもなお、父はなお忍耐深く彼に接し、「子よ」と呼び続けるのだ。

* * *

親子の縁を切るようにして出奔した弟が望んだ新しい関係は「主人と奴隸」であった。恐らく親子に戻るのには虫が良すぎると思ったのだろう。しかし父はその提案を拒絶する。「子と呼ばれる資格はない」と言う弟息子を抱きしめ、晴れ着、指輪、靴を用意させる父の姿には弟を我が子として受け入れる愛が溢れている。弟は今や無一物だ。しかし彼はやかけがえのない「絆」を回復した。では兄はどうだろう。父は彼にも言う。「子よ。お前はいつも私と一緒にいる。私のものは、全部お前のものだ。」兄は全部を持つている。土地、動物、財宝。それら一切は長男である彼のものだ。ただこの時点で彼には足りないものが一つある。絆である。彼が父親との絆を回復するためには一つの事をしなければならぬ。それは父をあなた呼ばわりするのを止め、「お父さん」と呼び、その勧めに従って弟の待つ祝宴の扉をあけることである。聖書の神はご自身を私たちの「父」だと啓示し、自らと関係を断絶しようとする人間を尋ね出して「子よ」と呼びかけて下さるお方。その呼びかけに応答するなら、神との、そして人との絆は回復する。主の呼びかけに応じ、祝宴の扉を今開こうではないか。